サポート・ご協力　ありがとうございます

■平成21年度　継続会員（敬称略・順不同、2009年６月１日～７月31日）

（正会員）大久保正司、川村志厚、真壁さおり、谷川俊太郎、芝原浩美、北尚登、片桐和紀、田代久美、渡辺祥子、福原和淑、渡邊兼光、紅邑晶子、新川達郎、沼倉雅枝、白川由利枝、内海裕一、八木健、坂下康子、木村正樹、西出優子、藤原範典、木幡勝幸、関口憲一、中津涼子、浅見紀夫、小林正夫、草島進一、（株）東日本放送、（特）チャリティ・プラットフォーム、（特）杜の伝言板ゆるる、（特）でんでん宮城いきいきネットワーク、人と組織と地球のための国際研究所、（特）みやぎ発達障害サポートネット、（特）あかねグループ、（特）多賀城市民スポーツクラブ、（特）宮城県断酒会、（特）イコールネット仙台、東北ＨＩＶコミュニケーションズ、フレッシュパール会、（特）いしのまきＮＰＯセンター、（特）山形の公益活動を応援する会アミル、（特）いわてＮＰＯ－ＮＥＴサポート、（特）まちづくり政策フォーラム、ＡＫＫ仙台、日本労働組合総連合会宮城県連合会、２１世紀研究会、（特）ソキウスせんだい、（特）蔵王のブナと水を守る会、（特）住民互助福祉団体ささえ愛山元、（特）ＭＩＹＡＧＩ子どもネットワーク、（特）ハーモニーハウス、（特）やまがた育児サークルランド、（特）活き生きネットワーク、（特）麦の会、（特）パートナーシップサポートセンター、（特）せんだい杜の子ども劇場、（特）みやぎ身体障害者サポートクラブ、（特）東北マンション管理組合連合会、地産地消を進める会、子ども虐待防止ネットワーク・みやぎ、ＣＩＬたすけっと、（特）ほっとあい、（特）ゆうあんどあい

（準会員）（社）日本損害保険協会東北支部、（特）都市デザインワークス、山口宏、渡辺雅昭、（社福）仙台いのちの電話、世古一穂、（特）ネットワークオレンジ、（特）白石うぐいす会、朝田恵美、針生祥子、（特）シャロームの会、齊藤衣代、木須八重子、高齢者配食サービスぽけっと・はうす、（特）塩釜市体育協会、鈴木典男、荒井勝子、静岡県東部パレット市民活動ネットワーク、（特）日本総合空手道連盟、宮城県麗人会、早坂恵美、岡崎トミ子、藤田佐和子、くらしきパートナーシップ推進ひろば、愛知絢子、上野裕子、高鷹厚、（特）子育てネットワークバルボンさん、鈴木素雄、日本たばこ産業（株）仙台支店、早坂毅、葛西淳子、（特）ふくしまＮＰＯネットワークセンター、小川真美、布田剛

お知らせ

総会＆記念シンポジウムご案内

入場無料

開 催 日：2009年9月5日（土）
会　　場：仙台市市民活動サポートセンター
　　6Fセミナーホール
開催時間：第11回通常総会
　　13:30～15:30（受付開始13:20）
　　：総会記念シンポジウム
　　16:00～18:00（受付開始15:50）
テ ー マ：「日本サードセクター経営者協会設立記念
　　シンポジウム」
ゲ ス ト：英国ＡＣＥＶＯ　ＣＥＯ　スチーブン・バブ氏

加藤哲夫のNPO経営相談

開 催 日：平成21年9月28日（月）
　　平成21年10月20日（火）
開催時間：13:00～17:00
場　　所：せんだい・みやぎNPOセンター
相 談 料：2,500円（1時間単位、会員は500円引き）
※予約制です。まずはお電話を。

調査で社会を変えようセミナー みんみんファンド助成説明会

開催日：平成21年9月15日（火）13:30～16:00
会　場：仙台市市民活動サポートセンター研修室５
第１部　市民による調査・研究の意義と活用例
講　師：西出優子さん（東北大学大学院経済学研究科准教授）
コーデイネーター：加藤哲夫（せんだい・みやぎＮＰＯセンター代表理事）
第２部　みんみんファンド助成説明会
第３部　個別相談会　※参加費無料。要申込です。

プロペラトークス vol.3

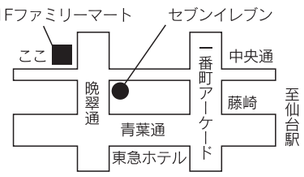
第３回目に「いのち」のリレーを紡いでくださるトークゲストは、宮城における有機農業のパイオニアで、村田町に在住の三田さえ子さんです。三田さんはペシャワール会みやぎなど、国際協力の市民活動などにもかかわっていらっしゃいます。
時期は10月頃を予定しています。
日時、会場、参加費等についての詳細は、決まり次第当センターのホームページに掲載します。

連絡先

特定非営利活動法人　せんだい・みやぎNPOセンター
〒980－0804　仙台市青葉区大町2－6－27　岡元ビル4F
TEL：022－264－1281　FAX：022－264－1209
E-mail：minmin@minmin.org　HP：http://www.minmin.org/

発行：（特活）せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事　大滝精一・加藤哲夫
編集部：小川真美・紅邑晶子
発行日：2009年9月1日
デザイン：氏家朗



岡元ビル4F　仙台駅から徒歩20～25分

｜編｜集｜後｜記｜

現在、インターンの、針生さん、張洋さん、杉山さん、のフレッシュなメンバーによって、大町事務局がグン！と若返っております！（と言ったら怒られるでしょうか…）
学生時代、私もこのようなインターンなどしてみたかった…勉強ももっとしておけばよかった…　卒業して初めて学生という身分の有難たさに気付くものですね。あの頃は時間が余っていた（ように感じた）ものでした。今は足りなくて困っているものナンバー１。あぁ、１日が36時間あって、睡眠時間が4時間で済めばいいのに…　（OGAWA）

七夕になっても梅雨明けしない天候と超多忙な状況のなか、次々といろんな締め切りがやってきた8月。中でも、最も難関だったのが総会用の報告書作り。今年は昨年の反省を生かしていろいろ工夫をしてみた。読んでみたくなる・読ませたくなる報告書が作れるように来年も頑張りたい。布田さん来年もよろしくお願いします。（べにむら）

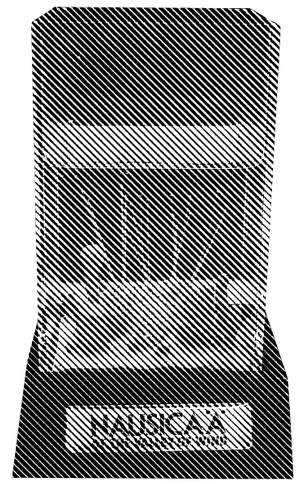
NPO法人認証団体数　｜　宮城県　573団体　2009/8/5現在　｜　全国　37,785団体　2009/6/300現在（内閣府）

2009年9月1日　Vol.65

みみんん

【題字】谷川俊太郎さん

MY FAVORITE　お気に入り小物拝見



理事対談のお相手、風見さんのお気に入り小物は、宮崎駿監督の名作「風の谷のナウシカ」に出てくる「王蟲」のオブジェ。水を入れるとＬＥＤが発光して、とても綺麗です。作品を通して語られる宮崎監督の「自然と人との共生」というメッセージは、風見さんにとって、環境や持続可能な社会を研究するにいたった原点なのだそうです。授業の中でも宮崎監督の作品と結び合わせて話をすると、学生さんたちはとても分かりやすいと感じてくれるとか。風見研究室のシンボルでもあるそうです。

■目次

P2～3　理事対談
P4～5　せんだい・みやぎNPOセンターの事業から（2009年6月―7月）
P6……　理事リレーコラム「私と市民活動」西出 優子
　　仙台市長選を見過ごさない会
P7……　らんち de MATCH♪
　　インターン紹介
P8……　新規会員・継続会員、編集後記、お知らせ、連絡先等

理事対談

若い人々の心を捉える魅力を持っている、CB(コミュニティビジネス)とSB(ソーシャルビジネス)。

今回は、宮城大学事業構想学部事業計画学科教授の風見正三先生と紅邑理事の対談です。コミュニティと人材育成など、どんなお話が展開されるのでしょうか。

■コミュニティ・ＣＢ・ＳＢと地域診断

風見/専門は「持続可能な地域創造学」とその具体的手法としての「CB」ですが、現在は個別に発展してきたCBの連携に取り組んでいます。自治体などの集まりでCBの話をする機会がありますが、その際「地域起業家」の概念をよく話します。地域起業家というのは「社会企業家」の地域版ですが、今、地域の課題を解決する社会起業家が求められています。最近ようやく「SB」「CB」という言葉が社会的に認知されるようになりましたが、こうした社会や地域を変えていこうとする「志」を発展させていくためのリエゾン(結合)型、ネットワーク型の戦略的な支援機能が必要とされています。こうした新たな領域の雇用創造は、まだ未成熟な段階といわねばなりません。これからは若い人々やリタイヤされた方々が社会的な事業や活動に関わっていけるよう、こうした分野の人材育成と雇用創造を本格的に進めなければなりません。そこが私が現在力を入れている分野でありますし、せんだい・みやぎNPOセンターに期待しているところでもあります。こうした人材育成の取組みとして、2008年から宮城大学で「CB」「地域計画」などの講義を、2006年からは滋賀県立大学で「地域診断法」の講義を担当しています。これは地域の健康状態から「カルテ」を作るアプローチですが、地域を元気にするためには、地域の状態を知り、総合的対策を練ることが重要です。コミュニティの活性化は、やはり「自然治癒力」が重要です。

紅邑　晶子
特定非営利活動法人せんだい・みやぎＮＰＯセンター
常務理事　事務局長　ＣＳＲ推進相談所所長

紅邑/ＮＰＯの人にセールスポイントは何かという話をするとみんな強みのことしか思い浮かばないんです。そこで弱みはどんなものがあるか考えてもらい、弱みも強みと逆転の発想をして頂くと「そういう考え方もあるな。」とほっとした顔になる。

■地域づくり・人づくり、日本とイギリスの市民社会、コモンズ

風見/地域づくりも同じです。強い部分を見つけ、弱い部分も認識する。その為には戦略的な連携も必要ですし、新たな能力開発や教育も必要になります。そのような自分の能力を向上させていくメニューが用意されていて、社会に出てからも、自分でキャリア開発をしていける。イギリスにはこうした職業訓練やキャリアデザインといった分野のCBが多くありますが、地域が人を育て、地域に育てられた人材が地域に貢献していく協同社会、地域の価値を地域全体で育てていく「コモンズ社会」を創っていくことが求められているのです。

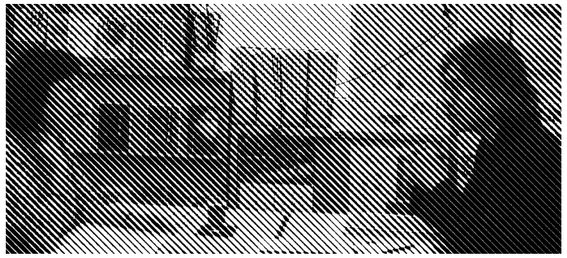
紅邑/日本のまちづくりは、いままで特定の一部の人によって実施されてきたように思います。風見さんはどのように取り組んでいますか？

風見/「地域を知る」・「地域を創る」・「地域を育てる」という3段階のプロセスをとっています。「地域を知る」は、地域の歴史や自然などを科学的に理解すること。「地域を創る」はそれらを踏まえて、事業計画や空間計画をつくるプランニングの段階。「地域を育てる」は、その為の人材育成や経営手法を実践する段階ですね。こうしたプロセスを経ながら、地域の人々が地域を客観的に知り、それらの情報を共有した上で、地域を主体的に経営していく仕組みを作ることが重要です。イギリスはCB分野でも先進的な国で、地域への貢献や市民としての義務が市民の間に醸成されてきた国です。またイギリスと言えば「コモンズ」という概念です。イギリスには、地域の住民が共に利用し守ってきた「コモンズ」という共有地があります。まさに、こうした生活環境の豊かさこそがイギリスの生活の質の高さの根底にあります。日本にもかつてはコモンズが存在していました。農村地帯の里山、漁村地帯における自然海岸の一部などは、「入会地」「入浜権」といった、地域の共有財産として維持管理されてきた歴史があります。日本社会の再生のためには、こうした失われたコモンズの再生に取り組まなければなりません。コモンズの再生とは、市場経済システムでは解決しにくい、環境、福祉、教育等の様々な問題を地域のつながりにより解決しようとするアプローチです。社会起業家やＮＰＯが取り組んでいる分野も、こうした地域のつながりを基に、経済活動と社会貢献を両立させようとするチャレンジといえるでしょう。

■これからの公共の場のあり方

紅邑/公共の場のあり方は今後変わっていくべきだと思うんですね。昔は地域に人が大勢集まるお宅があったけれど、そういう地域のつながりがなくなった今、新たなコミュニティの場として、目的がなくても様々な人々が居やすい場所、そういう場所が必要だと。

風見/その通りです。イギリスのコモンズとは、まさにそうした地域の交流の場です。そこで自由気ままに時間を過ごすことができる居心地の良い場所なんです。こうしたことが、豊かな英国の暮



らしの原点になっていると思います。

紅邑/日本はある意味省庁の管轄別に公共施設が作られていますよね。だけどそういうこととは関係なく、どんな人が居てもいい、そういう設置目的を横断した場所というのがもう一方で必要だと思います。その場所は、行政だけでなく企業や市民自身がつくりだしてもよいと思います。

風見/例えば都市空間の質を語る時「仙台」では「定禅寺通り」が高い評価を受けることが多いわけですが、これは都心の一等地に豊かな緑があって、それが商業空間としてだけではなく、様々な使い方で市民に共有されているからです。つまり人々が自由に入ることができて、その価値を共有できる空間づくりが都市の豊かさや魅力につながるということですね。かつては空地があって学校帰りに遊びました。そうしたものがなくなり、都市の余白が失われてきた現状では、こうした場所を計画的に創りだすことでしか失われたコモンズの再生ができない時代になってしまったのです。都市計画の分野でもようやくその重要性がわかってきて、「コモンズの再生」や「コミュニティデザイン」といったことが重要なテーマになってきています。

紅邑/最後に、当センターに期待されることを伺いたいのですが。

風見/ますますＮＰＯや社会起業家の仕事が重要になっていくでしょう。しかしＮＰＯや地域を支える事業というものは、急に拡大や成長していくものではありません。大切なことは、地域の課題を解決するため、地域に密着して適正な利益を得ながら、地域の中で誇りをもって働ける仕事をいかに継続できるかです。そのためには、それらを支えるための戦略的なアライアンスやそれらを実現する結合型、ビジネスモデル創造型の中間支援機能が重要であると感じます。個別の事業を自立させていく支援機能は十分整備されてきていますが、これからは、個別の事業から生まれたアイデアを異なった視点から評価したり、異質なアイデアを結合させていくことが重要になると思います。そうした試みにより新たなポテンシャルを引き出したり、弱みと思っていた要素を強みに変えられるような戦略的なマッチングを進めていくことが大切になります。そこに、せんだい・みやぎＮＰＯセンターが進んでいって頂ければと思います。またＮＰＯの次世代へのバトンをわたす環境整備も重要です。これからは若い世代を育てるためにも、ノウハウの継承や新たなアライアンスの仕組みもしっかり作っていかねばなりません。CBやSBの分野は社会改革に向けた本質的な命題ですし、若い人々の心を捉える魅力を持っています。今こそ、ようやく育ってきているこうした社会的な事業領域をさらに魅力的なものにし、次世代にバトンを渡していくことが重要です。そのためには、その魅力を広めるための広報活動も重要です。これからはこうした社会的な事業や活動を行う様々な個人や組織の全国ネットを築き、それらのノウハウを共有していくことも重要になるでしょう。そして、そこから投げられた様々な問題やアイデアに対して、全国の専門家が蓄積されたノウハウをフルに活かして、問題解決や事業創造を支援できるネットワーク型の組織をつくっていくことが重要になっていくと思います。

ゲスト
風見　正三さん
宮城大学　事業構想学部
事業計画学科　教授

プロペラトークスvol.2

７月２３日（木）、第2回プロペラトークスで、今年のテーマ「いのち」のバトンを繋げてくださったのは、東北会病院院長・WANAクリニック院長で精神科医の石川（いしかわ）達（とおる）さん。会場は前回に引続きシャンパンハウス「ル・オー・ルージュ」でした。

■日本は飲酒について寛容な国

雨のシトシトと降るその夜、晩翠通りに面するル・オー・ルージュの大きなテーブルに、石川さんを囲むように参加者が座りました。予定時刻通り19時からプロペラトークスがスタート。硬い雰囲気をほぐすため「アルコール依存症テスト」のアイスブレイクから始まりました。

①酒の量を減らす必要性を感じたことがある
②酒のことで非難されたことがある
③飲んだ次の日に罪悪感を感じたことがある
④向かい酒をしたことがある、の４項目。

曰く、この依存症テストは米国基準で作られているので、日本人ではけっこう該当する人がいる、ということで、飲酒について日本は寛容な文化なのだそうです。

■依存症は世代間連鎖し、再生産される

とはいっても、厳然とアルコール依存症に苦しむ人たちが存在し、そういった患者さんを診るなかで、依存症は当事者のみならずその家族やパートナーなども巻き込み、<アディクション：依存症>＝悪循環を作り出しているという事実がはっきりしてきたそうです。さらに、依存症が世代間連鎖し、再生産されているということも多いとか。特に、２～３歳時の育成環境に影響されることがあり、この時期、確かな愛情を受けられていることで、他者と親密さを築く能力や、適切な距離を取ることが出来る能力が形成されるのだそうです。

石川さんの話に、参加者は飲食も忘れ聴き入っていました。その後も質問は途切れず、予定時間をオーバーしても石川さんと参加者の交流が続き、充実した時間となりました。

次回は、有機農業を実践され、ペシャワール会を仙台から応援する会にも関わっていらっしゃる、三田さえ子さんです。ご期待下さい。（最終頁参照）（大石俊輔）

仙台市市民活動サポートセンター10周年記念シンポジウム
こんな仙台に住みたいな～まちを育む市民活動とコミュニティ～

７月４日（土）仙台市市民活動サポートセンターの１０周年記念シンポジウムを、市民活動シアターを会場に開催しました。１９９９年６月３０日に全国初の公設民営の市民活動支援センターとして開館したサポートセンター。１０周年をひとつの節目として、これからの仙台の市民活動について皆さんと一緒に考えたいと、記念講演、パネルディスカッション、交流会という三部構成で実施しました。

■市民活動シアターが<幻燈会>会場に！

記念講演の講師としてお迎えしたのは、全国各地で住民主体のまち育ての活動にかかわっている延藤安弘さん（（特活）まちの縁側育くみ隊　代表理事）。市民活動シアターの正面スクリーンには、空き家を利用した地域住民の場づくりの様子などが次々と映し出され、延藤さんの名調子とあいまって独特の雰囲気の中、講演会ならぬ<幻燈会>が進行しました。会場からは時折笑いが起こる場面もあり、参加された皆さんは楽しみながらも、今後の活動の参考になるお話を伺うことで、多いに触発された様子でした。

■点から線となった仙台の市民活動を「面」にしていこう！

パネリストとしお迎えしたのは、中村祥子さん（（特活）グループゆう　代表理事）、立岡学さん（（特活）ワンファミリー仙台　理事長）、西大立目祥子さん（まち遺産ネット仙台　代表）の三名の皆さん。講演に引き続き延藤さんにもコメンテーターとして参加していただき、コーディネーターは当センターの加藤代表理事が努めました。

パネリストの方々の活動紹介を受け、仙台ではこの１０年に、多くの市民活動が力をつけ、活動が点から線となってきたことを改めて確認するとともに、今後は、市民活動団体、地域、行政などが連携しながら「面」にしていくことで、仙台の街がもっと豊かになるのではないかと話し合われました。（小松州子）

たがサポ１周年記念イベント！

６月６日（土）、多賀城市市民活動サポートセンター開館1周年記念事業を開催しました。当日は250名以上のＮＰＯ・町内会関係者や行政担当者などが集まり、多賀城市における地域づくりの“これから”について理解を深めました。

■市民活動の「パワー」と「可能性」を知る

今回は目玉企画として「市民活動テーマトーク」を実施。これは、「地域福祉」「生涯学習と地域づくり」「地縁組織」「子ども・子育て」の各分野で活躍している団体からリーダーをゲストにお招きし、団体の立ち上げから現在までの軌跡と、具体的な活動内容の紹介をいただきました。自らの経験に基づく現場からの熱い報告とメッセージは、改めて市民活動のパワーと可能性を知る機会となり、参加者に感動を与えました。

■交流企画は大賑わい！

参加者同士をつなぐ交流企画としては、多賀城市内のNPOを紹介する「市民活動大博覧会」のほか、地元特産のトマトを用いたミネストローネ鍋の提供やパンのチャリティ販売などを開催。特にピラフ味（！？）のアルファ米作り方実践講座は好評でした。これらの企画が連携のきっかけとなった団体もあったようで、食べ物はすぐに完売となりました。

■多賀城らしい「市民活動」とは？

パネルディスカッション「多賀城市をつくるのは私たち～たがサポが支える市民活動のあした」では、多賀城市に必要な市民活動のあり方について意見交換を進めました。ここでは、「お互いさま」という気持ちをもとに、NPOや町内会などがそれぞれの立場を活かして協働しながら、地域の課題に向き合っていくことの大切さについて話を深めて行きました。開館1年目で17,000人の市民を迎えた「たがサポ」。地域づくりの拠点としての役割と、深まりつつある地域との絆を確かめた1日でした。（工藤寛之）

「日本サードセクター経営者協会（JACEVO）設立準備フォーラム」

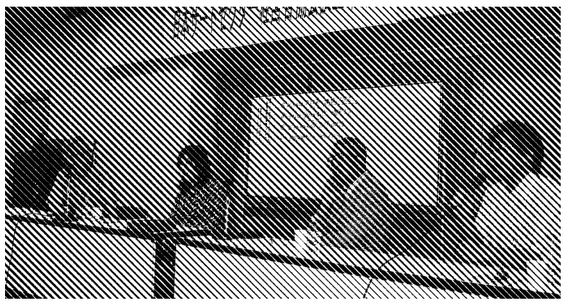
9月1日に設立を予定している「日本サードセクター（※１）経営者協会（通称：JACEVO（ジャキーボ））設立準備フォーラム」が2009年7月27日（月）仙台市市民活動サポートセンター・セミナーホールにて開催されました。

■日本のサードセクターは異母兄弟のようなもの

初めに、NPO法人「市民フォーラム21・NPOセンター」代表理事後房雄さんがこのたびのフォーラムの趣旨について述べました。続いて第1部は、公益財団法人「公益法人協会」理事長太田達男さんから「公益法人改革と日本のサードセクター構築」というテーマでお話しいただきました。太田さんは「日本のサードセクターは、異母兄弟のようなもの。公益法人制度が変わった今こそ、一緒に集まり話をすることができるかたまりになった。」また、「じっくり経営者としての話をすることがNPOの経営者には少ない」と話されました。さらに「サードセクター」には、市民の奉仕、会費などの市民の資金、行政のような形式や手続きに縛られない市民の知恵・市民の価値観があることを忘れてはならないと述べました。

第2部のパネルディスカッションでは、後さん、太田さんに加えてJACEVO設立準備会幹事・事務局長の藤岡喜美子さん、当センターの加藤代表理事も加わり、「日本のサードセクター構築の方向性」についての意見交換が行われました。なお、9月5日（土）に行われる当センター総会後の記念講演では、イギリスからACEVOの事務局長をお招きすることになっています。（最終頁参照）（紅邑晶子）

※１：ここでいうサードセクターとは、NPO法人から一般および公益財団法人、一般および公益社団法人、社会福祉法人、学校法人、医療法人、任意団体、協同組合、社会的企業等を含むもの。これらを政府/行政や企業に並ぶ、第3のセクターとしての存在感を高めることを意図して使っています。



●理事リレーコラム

「私と市民活動」

西出（にしで）　優子（東北大学大学院経済学研究科　准教授）

私の市民活動との初めての出会いは世界食糧デー・グループへの参加です。農業体験を実際に行いながら食料問題について検討し、具体的な解決案の提案などを行うグループで、当時の私は大学1年生でした。周りには、フェアトレード製品を扱う第三世界ショップが途上国の製品を展示販売するなど南北問題や海外情勢について考える機会に溢れており、この活動のおかげで国際協力に関心を持つようになりました。

一方、地域社会への関心も、あるボランティア活動をきっかけに高まりました。それは私のふるさと沖縄を見つめなおそうという取組みです。「生まれたところを愛したい」というキャッチフレーズで、東京後楽園で沖縄の歴史・文化に向き合いながらそれらを広く発信しようという試みでした。社会人1年目のときで、私の人生のパートナーはそのときに出会ったボランティア仲間です。仙台とのご縁も市民活動がきっかけです。1999年、日本NPOセンターが開催した全国NPO会議のお手伝いをするため、仙台の地に初めて足を踏み入れました。その後、米国留学などを経て2007年より東北大学で非営利組織論（NPO論）を担当しています。

現在は、大学での学びと地域での実践を如何に有意義なものとして結びつけるか、を念頭に置きながら日々の仕事に取り組んでいます。例えば、仙台のNPO活動を体験するCARESケアーズへの参加をゼミ生に働きかけたり、NPOの人材マネジメント・プロジェクトを立ち上げ、大学院生を中心に、東北地方におけるNPO人材の現状と課題を調査してまいりました。理論と実践の融合、実践に役立ってこそのNPO論です。お世話になったNPOの皆様には深く感謝します。

今後は、多様な世代の人々が、より様々な形で市民活動に参加し、NPOを立ち上げたり、就職・転職したりすることが身近で当然になる時代が到来することを期待しています。最後に、あらためまして皆様、今後ともよろしくお願い申し上げます。

【訂正】「みんみん」vol.64（7月1日発行号）p.6、理事リレーコラム「私と市民活動」（渡辺一馬さん）の文中に「NPO法人ハーベスト」とございましたが、（認証申請中）の文字が抜けておりました。関係各所の皆様には大変ご迷惑をお掛け致しました。お詫びして訂正致します。

見すごさなかった仙台市長選挙

仙台を拠点に地域の課題解決に取り組んでいる市民活動団体にとって、仙台市長選挙は仙台の舵取りを誰に任せるかを決める大きな節目です。そこで、この選挙に合わせ、仙台の市民活動関係者が集まって2009仙台市長選挙を見すごさない市民活動の会（以下、見すごさない会）を立ち上げ、市民マニフェスト運動や公開討論会を実施しました。当センターではこの会の事務局を担いました。

5月22日（金）、40名ほどで集まって見すごさない会の発足会を開催し、会として取り組む3つの活動を確認しました。1つは市民版マニフェストの作成と公開、2つめは各立候補予定者のマニフェスト評価、3つめが公開討論会の開催です。

市民版マニフェストは市政全般を網羅することは目指さず、市民協働をメインテーマに、発足会で出た意見を元に起草委員会でまとめ、5月29日（金）には記者発表を行いました。また、各立候補予定者にも市民版マニフェストを送付し、事務所もそれぞれ訪れて、各自のマニフェストを送っていただくことと公開討論会への出席を要請しました。

マニフェストの評価会は6月に2回設定し、7月初めに追加で1回と、計3回開催しました。6月については時期の設定が早かったということもありますが、最終の3回目でも各立候補予定者からのマニフェストが揃わず、実質的なマニフェスト評価会は結局開催することができませんでした。

そして7月8日（月）、仙台市民会館小ホールにおいて公開討論会を開催し、すでに立候補表明をしていた4名に出席していただき市政に対する考えを伺いました（最終的な立候補者は6名）。開催にはローカル・マニフェスト推進ネットワーク東北に協力を得て、同会の代表で東北大大学院教授の山本啓先生にコーディネーターを務めていただきました。

公開討論会は、市民協働、政策形成への市民参加、ワーキンググループ、行財政改革と議会改革という、事前に伝えておいた4つの共通テーマの質問に回答してもらう討論タイム1と、各立候補予定者が最重点と考えるテーマについて話してもらう討論タイム2に分けて行われました。こちらの質問の意図・共通テーマの背景が理解されてない面もあり、必ずしも質問と回答がかみ合っていなかったのは残念なことでしたが、約250名の参加を得て、各立候補予定者の政策や考えを明らかにすることができたのは大きな成果でした。それから、ブログを使って市長選の状況や会の活動を伝えたり、動画共有サイト（YouTube）で公開討論会の様子を流したのも新しい試みだったと思います。

選挙の結果、市民協働の市政推進を掲げた奥山新市長が誕生しました。見すごさない会は今回の選挙をもって解散しましたが、新市政への政策評価や市民側からの政策提案も今後必要になるでしょう。今回の経験をそうしたことに活かしていければと思います。（布田剛）

らんち de MATCH♪　第5回

今回のゲストは、保育士でつくる子育て支援グループ、SENDAI NPO 子育て応援隊「ピンポンパン☆」代表の菅野理枝さんと、都市計画・まちづくりを推進する特定非営利活動法人都市デザインワークス代表理事の佐藤芳治さんの2名をお招きしました。団体名だけ伺うと、ちょっと異色（？）とも思えるこのマッチング、ふたを開けてみればポロポロと共通点が飛び出し皆びっくり。どんな点が共通していたのか、まずはお互いの団体紹介からスタートです。

―まずは自己（団体）紹介―

最初は菅野さん。「主にみやぎ生協新田東店で親子向けイベントを1日に2回実施しています。きっと3、4歳児が多いだろうと予想していたら、実は0歳児が多かったんですね。3、4歳ともなると保育所に行ったりしますが、0歳児は行き場がほぼ無いんです。そんな親子同士をつなぐきっかけ作りもしているのですが、輪が広がって、親たちが独自に育児サークルなどを作り始めたんです。それは嬉しかったですね。」食べるのも忘れたように一生懸命お話くださる菅野さん。独自に作成された、子どもと一緒に歌って踊れるCDもお持ち下さいました。小さいお子さんお二人のお父さんでもある佐藤さん、「では1枚、頂きます。」とお買い上げ。菅野さん、営業上手ですね。

そして今度は佐藤さんの番。「団体立ち上げ時、株式会社かNPOかで迷ったのですが、市民の声をまちづくりにきちんと反映させていきたかったので、あえてNPOの形にしました。事業型NPOです。毎年恒例の活動としては、仙台の街のシンボル広瀬川の周辺を市民と一緒に歩いて、普段知られていないスポットを紹介するガイドツアー。リピーターも増えて、皆さんに喜んで頂いているのですが、今後はそれをいかにまちづくりに活かしていくか、どんな人達を巻き込んでいくかという事が課題です。」他のNPOとも協働し、まちづくりに市民の声を反映させ、行政をも巻き込んだ活動を進めていきたいとおっしゃる佐藤さん。優しい口調の中にも熱い想いが伝わってくるようです。

―意外や意外の共通点とは―

菅野さんのお住まいの岩切。そこで菅野さんは土地の歴史を調べ、昔からの住民だけでなく、新しく移り住んだ人に向けても岩切の素晴らしさを伝えていきたいと、手作り新聞「岩切旬の情報宅急便」を、自分と同じような子育て中のお母さん達と作っていたんだそうです。「ピンポンパン☆」で十分お忙しいのかと思いきや、まちづくりにも関わっていらしたなんて初耳です。先日取り壊された宮城野区新田の仙台政府倉庫（米蔵）をめぐっても、保存活用の提案活動を応援していた佐藤さんと、以前その米蔵の目の前の幼稚園にお勤めで、よく子ども達を連れて倉庫見学に行っていて、同じく取り壊しに反対だった菅野さん。ランチが進むなか、そんな共通点があったことも判明しました。

「なぜ行政は歴史的建造物を残そうとしないのか！」と議論は白熱。今回、気付くとテーマはすっかり「まちづくり」になっていました。じっくりお話してみますと、こうして思いがけない新たな「引き出し」が開かれ、その方の新しい側面を見せて頂くことができます。次回はどの方の、どのような引き出しが開かれるのか楽しみです！（小川真美）

新スタッフ自己紹介

張洋（チョウヨウ）と申します。NPOについてもっと勉強しようと思い、中国の大連から留学に来ました。趣味は旅行です。去年の夏休み、北海道に一人で一か月ぐらい行ってきました。
張洋（勤務地：大町事務局）

はじめまして！京都で大学生をしています、杉山芙(ふ)由(ゆき)です。今月から3ヵ月間インターンとして働くこととなりました。分からないこともたくさんありますが、たくさんの人たちと出会い、成長していきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。
杉山芙由（勤務地：大町事務局）